

主日礼拝 2020年11月15日(日)

題 「共にいる喜び」

テキスト：ローマの信徒への手紙15章：22～33節
(聖書の箇所は最後にあります。)

宣教者パウロは長年ローマからスペインまで主イエスの名を伝えるために行きたかったのですが、ローマに行くことは、なかなか実現せず、最後キリストのゆえに迫害される者として囚人としてローマに行くという生涯でした。スペインには行けたかは不明なのですがイスパニア、スペインは当時、「地の果て」と思われていたようです。聖書の使徒言行録によれば、天に挙げられる時イエスさまは弟子たちに「8:あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」と語られましたが、まさにパウロはそのことの証人として働いたと思えるのです。

今日の聖書の箇所でパウロは今後の伝道旅行の計画について語っています。パウロにとってはイエスさまを伝える伝道は、旅行でもあったのです。伝道旅行です。しかしそれは命がけの旅行でもあったのです。聖書は人間にとって人生は、旅であると受けとめているようです。キリス者のゴールは神さまの待つてくださっている輝く御国にです。人生は御国への向かう旅です。

◆ローマ訪問の計画

パウロにとってローマに行く機会はあったのですが、様々な理由で実現できなかったようです。

「23:しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前か

らあなたがたのところに行きたいと切望していたので、」と語っています。

アジア地方、今のトルコですが、パウロはこの地域にイエスの名を伝え回ったのです。伝道が成功するか、失敗するかは問題ではないのです。主イエスを伝えずにはおれないという心だったと思います。パウロの主イエスを想う心意気を感じるのです。「切望していたので、」という言葉は、他の聖書の訳では「熱望していた」ということなのです。こちらの訳がパウロの気持ちがより伝わるように思えるのです。みなさま、今切望していること、熱望していることはありますか？ 神さまに切望、熱望していることをあきらめずに祈っていただければよいのです。神さまは善い方ですから、求めるわたしたちに最善をなしてくださると信じます。形としては、わたしたちが思っているようにはならなくても最善のことをなしてくださるのです。

24:イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです。

なぜローマにパウロは行きたかったのでしょうか。

ローマ帝国の中心都市に行きたかったのでしょうか。そうではないと思います。「しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、」とあります。これです。ローマの信徒の人たちと共にいて、主イエスにあって

共にいる喜びを分かちあいたい、との思いです。喜びを味わうということは、苦しみも共に味わうということです。

わたしは、今はコロナ禍ですが、牧師を含めて信徒の交わりの質が問われ、揺さぶられ、深められ新たに方向づけられる時となるのかもしれないとの希望を主にあって持っています。

パウロは、ローマにしばらくいて、イスパニア、今のスペインにイエスの名を伝えたかったのです。パウロはスペインに行ったとは、聖書には書いてありません。ローマで地上の終わりを迎えたのかもしれませんが。わたしたちも最後の地上の望みは神様に委ねる、お任せする心を持っておきたいと願うのです。パウロは、神さまの約束の地を前にして、見ることはできたけれども入ることはできなかったイスラエルの指導者モーセと同じ気持ちになったかもしれません。

この時、パウロにはローマに行く前に、大きな務めがあったのです。

25:しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。

エルサレムはイエスさまが十字架につけられよみがえられた場所です。ペンテコステの日に神の霊、聖霊が降り、最初の主イエスにある群れ、キリスト教会が誕生した場所です。しかし、エルサレムの信徒たちはイエスを主と信じる熱い信仰は持っていましたが、生活が貧しかったのです。

パウロは、異邦人、外国人伝道をする中で、エルサレムにいるキリスト者の生活を助けたかったのです。そして実際、パウロが伝道した地域の人たちの献金を預かっていました。それをローマに行く前に、エルサレムの教会の人たちに渡す責任、働きがあったのです。

26:マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。

27:彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもの

で彼らを助ける義務があります。

相互に助け合う関係です。外国にある教会はエルサレムの教会の霊的な賜物に与り、エルサレムの教会は援助を受ける。どちらの主の教会として必要なことでした。この祈りの中で行われる相互支援は、主イエスを通して与えられる神さまによる愛の相互関係だったのです。

「29:そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています。30:兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、31:わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように。」とパウロは願っています。

パウロの願い、切なる願いです。祈ってほしい。共に戦ってほしい、と。パウロはユダヤ人キリスト者から見れば、迫害者でありましたし、ユダヤ人からみれば裏切り者ともみなされていたのです。

パウロは自分のために祈ってほしいと謙虚に頼むのです。32:こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。33:平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。

この先、ローマの人たちの祈りによって、パウロはエルサレムへの旅、ローマへの旅を続けることができたのです。イスパニア、スペインへの旅は未完の旅となったかもしれませんが、未完の旅は神さまに委ね、きっとパウロの心は「わが恵み 汝に足れり」との神さまからの言葉に満たされ、主イエス共にあることを感謝して主を賛美して生きたと想像するのです。わたしたちも、これから先の人生を神さまから与えている信仰者としてのこの世の旅を主と共に歩んで行きたいと願います。

◆ローマ訪問の計画

- 22: こういうわけで、あなたがたのところに何度も行こうと思いつながら、妨げられてきました。
- 23: しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところにいきたいと切望していたので、
- 24: イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです。
- 25: しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。
- 26: マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。
- 27: 彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります。
- 28: それで、わたしはこのことを済ませてから、つまり、募金の成果を確実に手渡した後、あなたがたのところを経てイスパニアに行きます。
- 29: そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています。
- 30: 兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、
- 31: わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように、
- 32: こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。
- 33: 平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。